

2024年度 緑の国際ボランティア研修

カンボジア国
2025年2月13日～2月21日

本研修は、国際緑化活動の重要性および
「緑の募金」の果たす役割についての理解を促進し、
将来の国際緑化協力人材を養成することを目的として
カンボジア国にて実施しました。



緑の募金

本研修は、公益社団法人 国土緑化推進機構が推進する
「緑の募金」を活用して実施しました。

目 次

「緑の国際ボランティア研修」を主催して	i
研修の目的と本報告書について	1
研修員・実施団体員	2
研修の日程	3
研修地の概要と主要プログラムの実施結果	4
現地協力大学より	10
研修員による報告	11
外部評価者による所見	44
共催団体による評価と今後の展望	45



「緑の国際ボランティア研修」を主催して

公益社団法人 国土緑化推進機構
常務理事 今泉 裕治

2025年2月13日（木）から9日間の日程で「緑の国際ボランティア研修」を開催し、無事に終了することができました。本研修を共催いただいた NPO 法人 環境修復保全機構の三原理事長をはじめスタッフの皆様には、企画段階から研修員の募集・選考、訪問先等との連絡調整、研修員へのサポート、そして成果のとりまとめ（本報告書の編纂）に至るまで、プロフェッショナルで細やかな対応をいただき、研修を成功に導いていただいたことに対し、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また、カンボジア側カウンターパートとして本研修を受け入れていただいたカンボジア王立農業大学の Dr. Borarin BUNTONG 氏をはじめ同大学当局の皆様にも、多大なご理解・ご協力に感謝申し上げます。

今回の研修には、日本の大学で多様な分野の専攻に属する学生 10 名とカンボジア王立農業大学の学生 3 名の計 13 名が研修員として参加され、国籍も専門分野も異なる者どうしにも関わらず、互いを尊重し理解を深めながら（時にはぶつかりながらも）、精力的にグループワークなどに取り組んでいただきました。研修の内容や準備など至らない点多々あったかと思いますが、皆さんが無事に研修を修了され、相応の達成感を得られた様子であることに安堵しているところです。

本研修の財源となっている「緑の募金」は、第二次世界大戦前後に荒廃した国土に緑をよみがえらせるため 1950 年に開始された「緑の羽根募金」を前身とし、30 年前の 1995 年に「緑の募金法」が制定されたのを機に「緑の募金」へ改称するとともに、国内はもとより海外の森林の整備や緑化の推進にも活用させていただいています。

我が国は、戦後からの国民挙げての国土緑化運動の取組により、活力ある緑と豊かな森林を取り戻すことができましたが、世界を見ると、開発途上国を中心に、人口爆

発や気候変動（地球温暖化）等を背景として多くの人が貧困や農地の荒廃（砂漠化）、森林の減少・劣化などに直面し、これらが国や地域の経済・社会の持続的な発展を阻害する要因となっているほか、生物多様性の喪失などの地球環境問題の悪化にもつながっています。

そのような中、「緑の募金」による国際協力事業の主力事業の一つとして本研修を開催し、次代を担う若者たちに世界の森林や社会の現状



を直に見聞し、異文化に触れ、考える機会を与えられたことは、「森づくり・人づくり」を通じて「人間が豊かな緑と水に恵まれた生活を維持できる」世界を目指すという「緑の募金法」の趣旨に合致した大変意義深いことと考えます。

これまで「緑の募金」にご寄附をいただいた多くの日本の市民や企業等の皆様に、あらためて心から感謝申し上げますとともに、研修員の皆さんにも、「緑の募金」が今回の貴重な経験を可能にしてくれたことを忘れず、将来、就職して収入が得られるようになったら、皆さんの後輩たちが同じような貴重な経験の機会を得られるよう、募金へのご協力をお願いする次第です。研修員の皆様が、今回の経験を糧に、これからの世界の持続可能な発展に大いに貢献されることを祈念する次第です。





研修の目的と本報告書について

本研修は、カンボジア国における森林減少や環境劣化の深刻な状況を踏まえ、国際緑化活動の重要性および「緑の募金」の果たす役割についての理解を促進することを目的として実施いたしました。研修では、現地大学およびNGOとの連携のもと、植林活動地の視察や植栽作業への参加、小中学校における啓発活動支援、農山村地域における実地調査、地域住民との意見交換等を通じて、森林保全の取組や持続可能な地域づくりの実態について理解を深める貴重な機会となりました。また、現地学生との協働活動や交流を通じて、国際協力における多様な価値観への理解と実践的なコミュニケーション能力の向上も図られました。本冊子は、こうした研修の成果を広く発信するとともに、国際緑化活動に対する社会的関心を高め、将来の事業実施に資する資料とすることを目的として作成するものです。

研修員・実施団体員

(1) 日本国から参加の研修員

No.	氏名	所属・学年
1	地行 響希 CHIGYO Hibiki	東京農業大学 国際食料情報学部 2年
2	平田 将晴 HIRATA Masaharu	北海道大学 農学部 3年
3	込谷 可菜 KOMIYA Kana	青山学院大学 地球社会共生学部 2年
4	三浦 公希 MIURA Koki	獨協大学 外国語学部 3年
5	清水 葉 SHIMIZU Yo	信州大学 農学部 1年
6	宋 為 SONG Wei	東京大学大学院 新領域創成科学研究科 1年
7	高橋 奈々 TAKAHASHI Nana	北海道大学 農学部 4年
8	王 嘉鈺 WANG Jiayu	北海道大学大学院 農学院 1年
9	渡戸 崇弘 WATADO Takahiro	東京農工大学 農学部 2年
10	周 文佳 ZHOU Wenjia	東京大学 工学部 2年

(2) カンボジア国から参加の研修員

No.	氏名	所属・職階
1	CHEN Maniza	カンボジア王立農業大学 農産学部 2年
2	LOEURN Rei	カンボジア王立農業大学 農業生物システム工学部 3年
3	SOPHAL Chamnan	カンボジア王立農業大学 農業生物システム工学部 4年

(3) 主催団体：公益社団法人 国土緑化推進機構（研修統括）

No.	氏名	所属
1	今泉 裕治* IMAIZUMI Yuji	常務理事
2	箕輪 和香奈 MINOWA Wakana	募金業務部 課長

(4) 共催団体：特定非営利活動法人 環境修復保全機構（事前研修・現地研修対応等）

No.	氏名	所属・職階
1	三原 真智人 MIHARA Machito	理事長・本部 管理センター長 / 東京農業大学 教授
2	河邊 久美子 KAWABE Kumiko	理事（普及担当）、本部 普及センター長
3	青木 景子* AOKI Keiko	本部 普及センター事務室長
4	鈴木 厚 SUZUKI Atsushi	本部 管理センター事務室長
5	上野 貴司* UENO Takashi	本部 管理センター事務室参与
6	RORNG Viream	カンボジア支局 Associate Program Coordinator
7	VA Sreylen	カンボジア支局 Assistant Program Coordinator

*カンボジア国における現地研修の随行者

研修の日程

(1) 説明会（対面）

日時：2025年1月9日(木) 18:00～19:30

場所：東京都千代田区平河町 2-7-4 砂防会館別館 A 棟 2 階蔵王会議室

内容：参加者の自己紹介、主催・共催団体紹介、緑の募金および研修趣旨 等

(2) 事前研修（オンライン）

日時：2025年1月31日(金) 13:00～15:30

場所：オンライン

内容：講義、グループワーク、渡航準備 等

(3) 現地研修

日程：2025年2月13日～2月21日（9日間）

場所：カンボジア国プノンペン都、トボンクムン州、シェムリアップ州

日	主なプログラム内容	宿泊地
1 2/13	・成田国際空港第1ターミナルより出発（13:20 発） ・プノンペン国際空港着（23:20 着）、現地集合	プノンペン
2 2/14	・王立博物館訪問、有機廃棄物を再利用した練炭を製造販売する Khmer Green Charcoal 訪問、キリングフィールド訪問 ・カンボジア王立農業大学訪問、グループディスカッション等	プノンペン
3 2/15	・プノンペンからトボンクムン州に移動 ・「緑の募金」植林活動地（小学校）訪問、地域住民と協働での植林地管理活動（補植等）、小学生への環境教育活動支援等	トボンクムン
4 2/16	・トボンクムン州からシェムリアップ州に移動 ・コミュニティフォレスト訪問（炭素貯留量測定調査）等	シェムリアップ
5 2/17	・「緑の募金」植林活動地（中学校）訪問、中学生と協働での植林地管理活動（活着率調査・補植等）、中学生への環境教育活動支援等	シェムリアップ
6 2/18	・森林消失が進む農山村域における農村調査、住民との意見交換等 ・生物多様性保護アンコールセンター訪問、グループディスカッション	シェムリアップ
7 2/19	・アンコール自然保護地区への訪問 ・シェムリアップ州からプノンペンに移動 ・グループディスカッション、研修成果発表会準備等	プノンペン
8 2/20	・カンボジア王立農業大学へ訪問、研修成果発表会準備 ・研修成果発表会、研修の振り返り、修了式 等 ・プノンペン国際空港にて現地解散、出発（24:30 発）	機内泊
9 2/21	・成田国際空港着（11:20 着）	—



研修地の概要と主要プログラムの実施結果



(1) カンボジア国の概要

カンボジア国は、東南アジアのインドシナ半島南部に位置し、タイ、ラオス、ベトナムと国境を接しています。国土面積は約18万平方キロメートル、人口は約1,600万人（2023年時点）で、首都はプノンペンです。国民の多くはクメール人で、仏教が主要な宗教として広く信仰されています。

豊かな自然環境と文化遺産を有するカンボジアは、アンコール遺跡群に代表される歴史的遺産とともに、多様な森林生態系にも恵まれています。しかし近年は、経済成長に伴う土地開発や違法伐採により森林面積の減少が深刻化しており、政府は2030年までに国土の60%以上を森林で覆うという目標を掲げ、保全・再生への取り組みを強化しています。また、地域住民による持続可能な森林資源の利用と管理を推進する「コミュニティ林業」も拡大しつつあり、国際協力の下で森林保全活動が進められています。

(2) 研修先の概要と実施結果

①「緑の募金」植林地

本研修の主幹団体である国土緑化推進機構は、環境修復保全機構の実施支援の下、カンボジア国における森林再生プログラムを2011年より推進しています。現地の寺院や学校等の共有地を主な対象として、参加型植林活動や森林保全と生物多様性の重要性に関するワークショップの開催をこれまでに6つの州で実施してきました。本研修では、2024年度の事業地であるトボンクムン州のSraesorm Thmey 小学校お

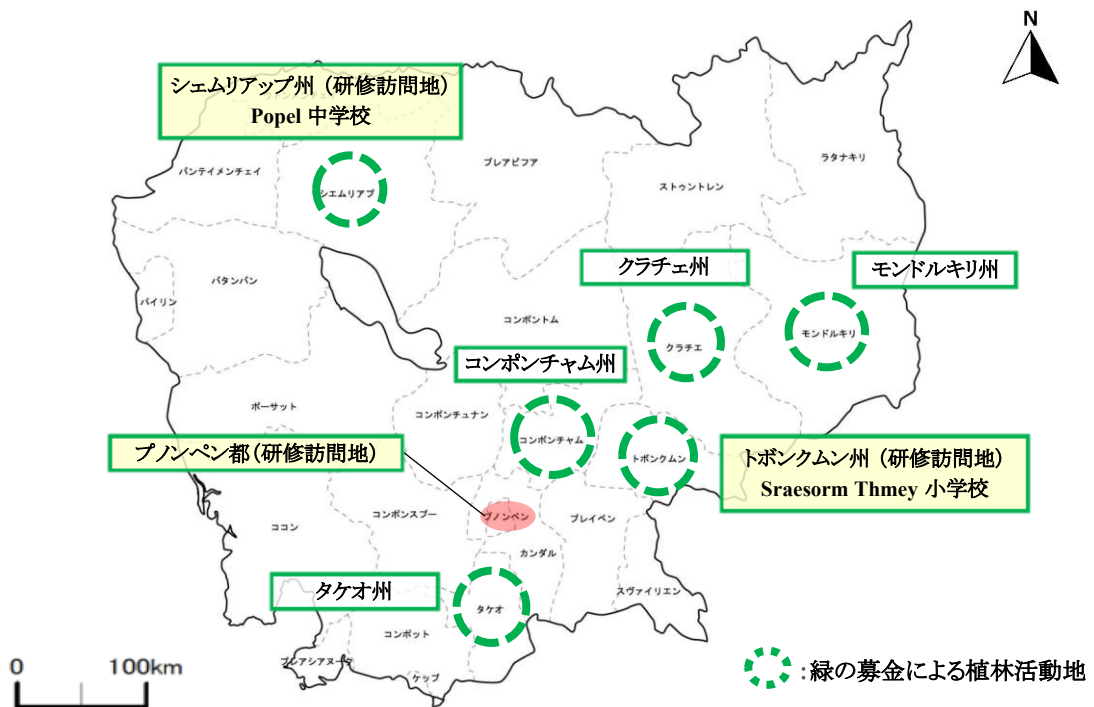


図1 カンボジア国において緑の募金により実施している植林活動地と本研修における訪問地

よびシェムリアップ州の Popel 中学校へ訪問し、児童や学生と協働での補植活動、生存率調査を実施しました。更に、研修員が自ら企画した環境教育を目指したワークショップを児童や生徒を対象に開催しました。



写真 1-1 Sraesorm Thymey 小学校における補植と環境教育ワークショップの実施



写真 1-2 Popel 中学校における補植と環境教育ワークショップの実施

② プノンペン国立博物館とキリングフィールド（プノンペン都）

カンボジアの首都にあるプノンペン国立博物館は、クメール文化と歴史を紹介する国内最大の博物館です。アンコール時代を中心とした仏像や彫刻、美術品などを多数所蔵しており、カンボジアの豊かな文化遺産を学ぶ貴重な機会となりました。

プノンペン郊外に位置するキリングフィールドは、1975 年から 1979 年のクメール・ルージュ政権下で大量虐殺が行われた主要な処刑場の一つです。現在は慰霊の場として整備



写真 2 キリングフィールド訪問

され、仏塔内には約 5,000 体の頭蓋骨が収められ、犠牲者の記憶を伝えています。研修員は、虐殺の歴史を学び、命の尊さと平和の重要性を再認識するとともに、カンボジア国の開発課題における特有のニーズ（課題）の影に、過去の殺戮の爪痕が今も深く残っている現状について認識を深めました。

③ Khmer Green Charcoal Co., Ltd. (プノンペン都)

Khmer Green Charcoal (KGC) Co., Ltd.は、ココナッツ殻などの農業廃棄物を原料としたエコ練炭の製造と販売を行う企業です。従来の薪や木炭に代わる持続可能な燃料を提供することで、森林伐採の抑制と大気汚染の軽減を目指しています。また、現地の雇用創出や廃棄物削減にも貢献しています。本研修では、製品開発部の部長（Mr. Narith VONG）による案内の下、練炭工場を見学しながらその生産工程を視察するとともに、質疑を通じて環境・経済・社会の調和を目指す持続可能な取り組みについて学びました。



写真3 練炭製造工程の見学

④ Knapor コミュニティフォレスト (シェムリアップ州)

Knapor コミュニティフォレストは、地域主導で管理・利用されているコミュニティフォレストです。地域住民が主体となり、森林資源の持続可能な利用と保全を目指しています。違法伐採の抑制や生物多様性の保護に加え、エコツーリズムや非木材林産物の活用を通じて、地域経済の活性化にも貢献しています。本研修では、環境保全と地域社会の発展を両立させる一つのモデルとして注目するとともに、敷地の一部をお借りして、樹木の炭素貯留量の測定手法を実践し学びました。



写真4 コミュニティフォレスト訪問

⑤ 生物多様性保護アンコールセンター： Angkor Centre for Conservation of Biodiversity (ACCB) (シェムリアップ州)

生物多様性保護アンコールセンター（ACCB）は、カンボジア・シェムリアップ州のプノンケーレン国立公園内、クバール・スピアン近郊に位置する自然保護センターです。2003年にドイツの Allwetterzoo Münster と ZGAP（絶滅危惧種保護協会）の支援で設立され、カンボジア初の野生動物保護施設として知られています。ACCB は、違法取引や密猟から救出された動物の保護・リハビリ・再導入を行うとともに、環境教育や地域住民と



写真5 野生動物の保護活動の見学

の協働、種の繁殖研究など多角的な活動を展開しています。施設では、テナガザル、センザンコウ、カメ、クジャクなど多様な絶滅危惧種が保護されています。本研修ではツアーガイドによる説明を通じて、様々な動物の生態や少数化した背景について学ぶとともに、野生動物の生息地の確保や生物多様性の保全において森林が果たす役割について知見を深めました。

⑥ トンレサップ漁業コミュニティとそれを支える自然資源（シェムリアップ州）

トンレサップ湖は東南アジア最大の淡水湖であり、カンボジアの食料と生計を支える重要な水資源です。季節ごとの水位変動により、多様な水生生態系と湿地林が広がり、漁業と森林の共存が見られます。湖周辺には多数の漁業コミュニティが存在し、漁業資源と森林の持続可能な管理が地域社会の生活に直結しています。本研修ではボートに乗って、漁業コミュニティの暮らしぶりを間近で見学するとともに、人々の生業と森林との密接な関わりについて学ぶ貴重な機会を得ることができました。



写真6 漁業コミュニティ訪問

⑦ Kna Krao 村—森林破壊が進む農山村地（シェムリアップ州）

Kna Krao 村は、シェムリアップ州の州都から約 50 キロ北に位置し、基幹産業はキャッサバやカシュウ等の換金作物の栽培と、自家消費用の稲作です。少なくとも 100 年以上前から人々が定住し、自給自足の生活をおくっていましたが、2000 年以降の急速なインフラ開発と農地開拓により、2001 年時点で存在していた原生林の 83%が失われました。農業への依存度が高まる一方で、住民は依然として森林資源に依存する伝統的な暮らしを営んでおり、人口増加とともに森林資源の枯渇リスクが年々高まっている状況です。本研修では、グループ毎に調査テーマを設定して事前準備と計画策定を行い、現地住民の協力を得ながら農村調査を実施しました。調査方法は、アンケート調査、インタビュー調査、村歩きによる観察等の手法を採用し、各グループでデータを分析し、研修最後の成果発表会で発掘した課題、気づきなどを共有しました。



写真7 農村調査

⑧ アンコール自然保護地区（シェムリアップ州）

アンコール自然保護地区は、カンボジア北西部シェムリアップ州に位置し、世界遺産であるアンコール遺跡群を中心に、森林や里山、地域住民の文化的活動を含む広大な地域です。この地域では、植林や環境教育、持続可能な資源管理の取り組みが、地域・国際機関の協力のもとで進められています。本研修では、UNESCO の世界遺産に登録されている自然保護地区を訪れ、自然資源や伝統的習慣、遺跡群の保護と継承の在り方について認識を深めました。



写真 8 アンコール自然保護地区訪問

⑨ カンボジア王立農業大学（RUA: Royal University of Agriculture）（プノンペン都）

1964 年に農林水産省管轄下で設立された王立大学の一つです。RUA は首都プノンペンの郊外に位置しており、農学部（Faculty of Agronomy）、畜産学部（Faculty of Animal Science）、獣医学部（Faculty of Veterinary Medicine）、森林学部（Faculty of Forestry）、水産学部（Faculty of Fisheries and Aquaculture）、農業生物システム工学部（Faculty of Agricultural Biosystems Engineering）、農業経済農村開発学部（Faculty of Agricultural Economics and Rural Development）、農産学部（Faculty of Agro-Industry）等の全 11 学部で構成されています。本研修では、RUA の研究・イノベーション部門（Division of Research and Innovation, DRI）を統括する Dr. Borarin BUNTONG センター長および国際協力企画部門（Planning and International Cooperation Office, PICO）のご協力のもとで実施されました。学内では、日本とカンボジアから参加した研修員の交流やグループディスカッションが行われるとともに、Dr. Borarin BUNTONG センター長をはじめとする学部生・大学院生を迎えて成果発表会を開催しました。成果発表後のディスカッションでは有意義なフィードバックを得ることができました。



写真 9-1 成果発表会



写真 9-2 修了式

現地協力大学より

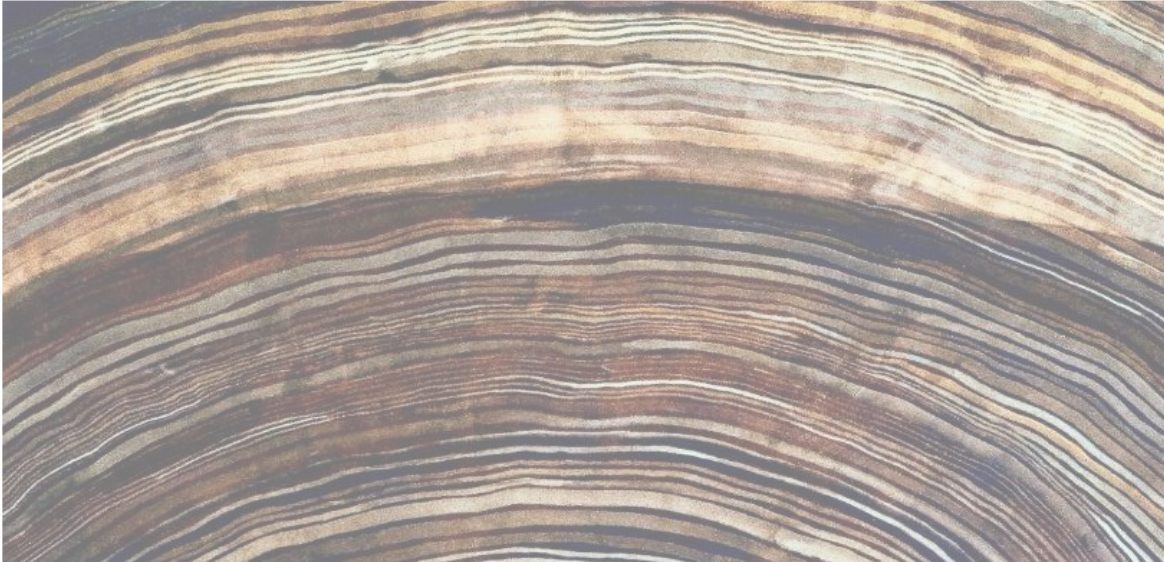
Dr. Borarin BUNTONG
Director, the Division of Research and Innovation (DRI)
Royal University of Agriculture, Cambodia

This International Green Volunteer Training addresses the urgent challenges of forest restoration and sustainable natural resource management, making it highly beneficial for communities in Cambodia. Through collaborative reforestation efforts with local residents and environmental education activities for children, the program promotes grassroots awareness and action. For students at Royal University of Agriculture, Cambodia, it provides a valuable opportunity to connect academic knowledge with real-world practice.

(内容の和訳)

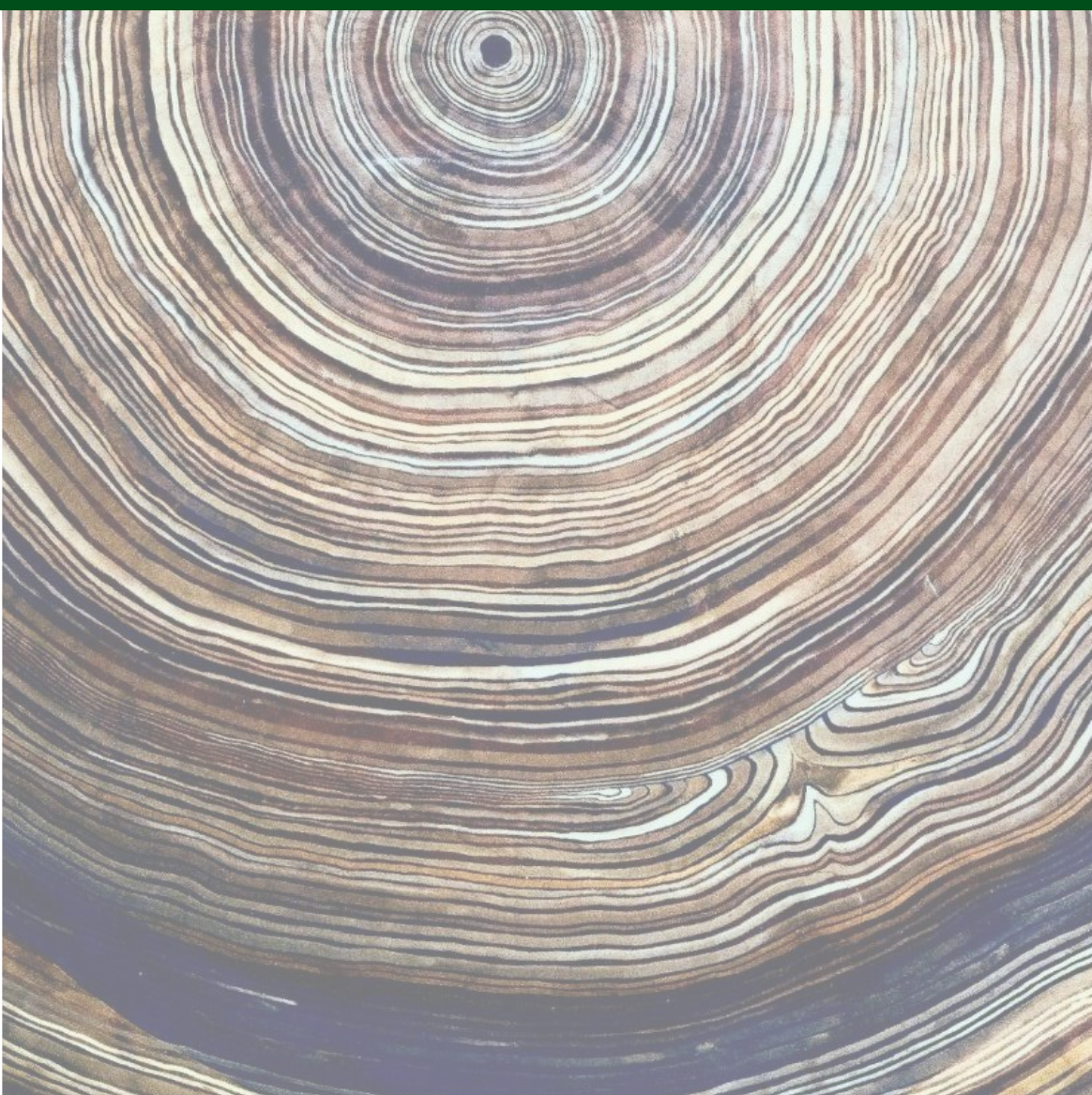
この緑の国際ボランティア研修は、森林再生や持続可能な自然資源管理といった喫緊の課題に取り組むものであり、カンボジアの地域社会にとって非常に有益です。現地住民と協働して行う植林活動や、子どもたちへの環境教育活動を通じて、草の根レベルでの意識の向上と行動の促進につながっています。本学の学生にとっても、理論と実践を結びつける貴重な学びの機会となっています。





研修員による報告

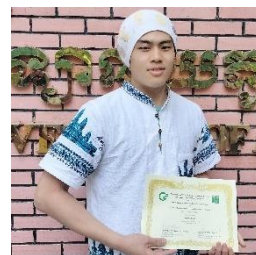
2024 年度 緑の国際ボランティア研修（カンボジア国）
～ International Training for Green Volunteers in Cambodia, February 2025 ～



私が見たメコンのけしき

地行 響希

東京農業大学 国際食料情報学部 国際農業開発学科 2年



1. この研修で得たもの

今回の研修において得たと思うものが主に3つある。

1つ目はフィールド活動をする事で初めて現地の現実を理解できたという経験だ。カンボジアにボランティアという形式で訪問することだったので、カンボジアに対して東南アジアでも国全体が貧しいほうだと思っていた。しかし実際に行ってみると、プノンペンやシェムリアップなどの主要な都市はとても栄えており、人や交通量の多さや建物や景観が都会であったことに驚かされた。現地では小中学生を対象とした環境教育や農村調査を行ったが、カンボジアでの生活を通して貧富の格差を感じた。小・中学校の子供たちの身に着けているベルトや荷物を見てみると見覚えのあるブランド品が多かった。本物かはわからないがちゃんとした身なりであることには変わりなかった。一方で川辺付近の高床式住居に暮らす子どもたちはずっと漁業など労働をしており、都心を離れた町では子供たちが押し売りしているケースも目撃した。たとえその国の経済レベルが高かろうが低かろうが国の中での貧富の差は生じていることを感じた。日本は支援制度が充実しているおかげで貧しくても最低保障を受けられるが、日本ほど先進国ではない地域では支援する財力もなく貧富の差

を縮めずにいると思った。

2つ目は環境教育や農村調査を経験できたことだ。そもそも環境教育を海外で学生の頃に経験できることがとても貴重なことである。海外へ留学に行き、言語や現地の文化を学んで吸収することは大学生でもしている人は多い。しかし、自分が持っている知識や経験を現地の子供たちに伝える経験は今回のようなボランティアに参加しない限り大学生で行っている人はごく少数である。各グループで計画を立て実際に講義してそれをフィードバックすることで実際に授業を円滑に進めるのがどれだけ大変なことかを感じることができた。今回お世話になった小・中学校や農村ではあたたかい方々に恵まれて個人的には行きやすかった。将来日本と海外をつなぐ仕事をしたいと考えているので、今回の実学は必ず今後の糧となるだろう。

3つ目は海外での生活や集団生活において最も重要なことはコミュニケーション能力と明るさだと感じたことだ。もちろん英語などの言語力はもちろん大事である。でもそれ以上に誰とでも打ち解けられる心と振る舞いが重要だと感じた。自分はもともとあまり人前にガツガツ出るタイプではなく、じっと目の前の状況を見守る性格であったので、ボランティアに参加する前は少し心配だった。小・

中学校でちゃんと講義できるのか、農村で住民と会話できるのか、それ以前に同じ研修員の学生とうまくやっていけるか心配だった。しかし、皆さんが積極的に話しかけてくださったおかげで私自身も話しやすく居心地が良かった。もっと楽しむことを第一に考えとにかく明るく振る舞うことを重視した。それからは時間の経過があつという間に感じ、とても充実した研修を過ごすことができた。他の研修員の方からも学ぶことは多くあり、皆が同じ専門領域ではなかったのも新たな角度からの見解を得て、また自分の専門医について共有できたことも良かった。こちら側が明るく接すれば相手も気さくに話してくれるため、言語能力のみならず人としてのコミュニケーション能力の大事さに気づけて良かった。

2. 今後の抱負

今回の研修を通してフィールド調査や環境教育の経験を海外ですることができ、これは将来考えている進路に大いに役立つだろう。私の所属する学科が農業開発なのでその路線にはなと思うが、まず私は農林水産省の総合職への就職を希望している。私の大学では様々な実学の経験を積むことができていたが、海外の地で経験することがあまりできていなかった。特に子供たちへの環境教育は私自身の中ではとても大きく、異国の地に自国の農業技術を普及する際にまずこちら側を信用してもらうことが重要であるため、今回の環境教育で培うことができた自分自身の伝えたいことを工夫しながら伝え、コミュニケーションをしっかりとることを忘れない大事さというのは、海外への農業開発には欠かせないことであろう。

私が希望する農林水産省では国際関係の仕事もあり、海外の方との交渉やディスカッションがあると思われるので、現場を知っている点や現場での活動経験があるというのはとても大きな強みになるだろう。いつになるかはわからないが、カンボジア以外にもベトナムでの仕事もしたいと考えており、気候や環境が近い地域での活動ができたことも個人的には有難く、現地で見た農業技術や労働方法を日本や今後携わる海外地域に活かしたいと考えている。従って、今回の経験は私の考えている将来に活かせるものが多く、それを他の人や次の世代にも継承していけるようにしたい。

3. Message to my buddy

Dear Maniza,

Hello, I'm Hibiki. Thanks, Maniza. I'm glad to be able to take environmental education and rural surveys. During the environmental education at the elementary school and junior high school, you translated our English into Khmer for us. In addition, you incorporated various ideas to make it easier for the students to participate in the lessons. I was very happy about that. If it had only been a simple translation from English without your creative efforts, the students might have become bored. You really helped us a lot. When we were preparing the final presentation materials, you helped me by summarizing the results of the rural survey and creating graphs on my behalf, which was very helpful. I couldn't give you much in return. I want to improve my English so that next time we meet, we can have more conversations. I'm very grateful for your support this time. If you ever have time, please come visit Japan!

Hibiki

1.5\$ = 15GB



平田 将晴

北海道大学 農学部 応用生命科学科 3年

はじめに

～研修への申込を躊躇しているあなたへ～

1.5\$ = 15GB、あなたにはこの意味がわかるだろうか？わからないのなら、少なくともこの研修に申し込む意義がある。あなたはこれまで何か国の空気を肌で感じただろうか？夢で見る景色にどのくらいのバリエーションがあるだろうか？それらはあなたの内面でどんな世界を形成しているだろうか？

この研修はとにかく濃密である。前日の午前 1 時まで調査の打ち合わせをし、朝 5 時に起きてアンコールワットで朝日を拝む。異国の空気と極限の精神状態が相まってヤバい脳内麻薬がドバドバである。バスの中でグーグーである。今この文章を書いている瞬間さえ、あのときの変性意識状態が残っているのかもしれない。

この研修は海外未経験者にも大変おススメである。特に、日々の退屈な生活に辟易し、フツウの観光旅行では満足できないそのキミ！研修はキミのために開かれている。私も本研修が初の海外経験であった。何となく東南アジアに憧れがあり、できるだけ安く 1 週間以上の滞在ができるプログラムを探していた。そんななかこの研修を知り、親に相談したところ、1 週間ちょいで 12 万円は安いらしい。なら申し込むか～、といった具合。

このくらいの動機で十分でしょう。

1.5\$ = 15GB、研修に参加して全身でカンボジアを体験したなら、きっとこの意味が、いや少なくとも私の伝えんとしている意図が理解できるだろう。この文章が今読んでいるあなたに何かしらの良い影響を与えられたなら幸いである。

総論 ～自分の話～

この文章のメッセージ的な部分は前のパートに凝縮したので、ここからは自分語りをしていこうと思う。そもそも、私はこの研修に実用的な成果は期待していなかった。映像や音声ではわからない非言語的な情報、つまりただ異国の匂いに包まれて、風に身を任せられれば満足だった。よって、文字情報として言語化しようとしても、あなたの目に私の体験は極めてチープな感想文に映るだろう。駄文お許し願いたい。そんな断り書きはともかく、先にも述べた通り私は海外未経験だったので、カンボジアでの体験全てが興味深く、刺激的だった。”1.5\$ = 15GB”さえも。

まず、参加前に掲げた「非言語情報を全身で感じる」という目標は大成功に終わった。カンボジア料理の独特なスパイシーさが特有の湿度を伴って漂っているような空気の質感、車が走り道路から巻き上がる土埃。もちろん雨季と乾季で違

う表情を見せるのだろうか、自分の中で「カンボジア」という場所を肌感覚として内面化できた実感がある。

私は普段札幌に住んでいるが、帰省(実家は神奈川)のために羽田に降りるたび、優しいぬくもりとしっとりした空気に、肩の荷が下りたような安心感を覚える。何度往復してもその感覚は変わらない。札幌の乾いた空気は、自分でも気づかないうちにストレスになっているのだろうか。一般的に、移住先の条件としてまず経済的な充実や治安の良し悪しが挙げられるのだろうが、私はそれらよりも土地それぞれの空気や匂いの質感が重要なように感じる。先述したように最初にカンボジアに降り立った印象は「スパイシーな湿度」。帰路で羽田に着いたときに感じたのは「パソコン室のにおいがする！」。

さて、研修中一番考えていたのは、カンボジアの人々の生活認識である。町中、郊外問わずとにかくゴミが多い。海外慣れしている人からすれば当然なのかもしれないが、特にプラごみがそこら中に散乱している。「海外は汚いって聞いていたけどこんな感じか〜」と。しかし数日が経ちその光景に慣れてくると、私の認識は変わった。「別にゴミ片付けなくても問題なく生活できるよな？」と。私は何か根拠があって掃除が重要だと考えているのではなくて、ただ「ゴミを片付けないとヤバイ！」という意識が刷り込まれているだけだった。そう考えると、町中にゴミが放置されている状態は不思議でも何でもない。振り返るとこれは日本の中でも同じことで、極端に部屋が汚くてもケロっとした顔で生活している人はごまんという。この研修の目的は環境問

題の啓発であるが、「本当に我々は環境教育をできる立場なのだろうか？」「地域それぞれの文化や美意識の問題と分離不可能なのでは？」とわからなくなった。この問いについては今でも答えは得られていないし、まだ世界的なコンセンサスがないからあの通りのゴミはそのままなのだと思う。

これらの経験を踏まえて、私のこれからについて考えてみたい。もともと私は将来について計画的に考える想像力が希薄で、この研修についても特に具体的なゴールを設けていない。そんな自分自身の意識からしても、今回の研修を振り返っても、やはり今回の経験が直接何かに役立つことはないと思う。それよりももっと漠然としたもの、「人から見た自分」の意識(メタ認知?)や、柔軟かつ冷静な状況判断などに貢献するように感じる。これらの能力はもちろん日本にいても日々磨かれ、それが積み重なって人間性を形成するのだが、「外国人としてその土地を訪れる」「決まった仲間と寝食を共にする」といった各要素が普段より劇的な内省の機会を齎したと思う。

今後の私の人生がどうなろうと、どこにしよう、何をしよう、そこにある空気を感じて、匂いを嗅いで、何か考えて発見して、そうした営為は死ぬまで変わらないだろう。今回の研修ではそれを再確認できたが、いつかこの世界認識をも打ち破る体験ができるのなら楽しみだ。

おわりに

～For all participants with me～

In the end of this essay, I'd like to thank all participants and ERECON staffs. I was nervous at the start of the tour, because I didn't have any confidence in my international

communication skills. However, everyone didn't make walls to communicate with each other, so I could relax and enjoy this tour. Especially I'd like to appreciate Group C members. We had had different ideas and experienced a lot of misunderstandings in group discussions. But we could finally make agreements every time and make it to the final presentation without any conflict or

resignation. I suppose it made the success that everyone didn't give up telling us our own ideas and their advantages. At the same time, we always tried to understand the contents of ideas carefully, I was surprised by the attitude, and it was impressive. In addition, I think the most important thing is we could enjoy these struggles! I "believe" we can consider memories in this tour as our happiness.



未来世代のために： 環境ワークショップから得た学び

込谷 可菜

青山学院大学 地球社会共生学部 2年



はじめに

私はこの研修を通して、「私たちが普段見ている世界はほんの一部に過ぎない」ということを実感しました。実際に現地に行き、自分の目で見て、耳で聞き、体験することの重要性を強く感じました。研修ではカンボジアの3つの都市を訪れ、さまざまな施設を巡りながら、環境問題や持続可能な森林保護について考察しました。特に、現地の小学校・中学校で実施した環境ワークショップが印象に残っています。

環境ワークショップでの学び

このワークショップには、日本国内のさまざまな大学や専門分野の学生が参加していました。そのため、自分では思いつかないような新しい視点や意見に触れることができ、とても刺激的でした。また、カンボジア王立農業大学（RUA）の学生とも協力しながら活動を進めましたが、私たちが使える言語は日本語か英語であり、現地の学生とはクメール語を話せる学生を介しての意思疎通が必要でした。

お互いが第一言語ではない言語で話し合い、共有することは決して簡単ではありませんでした。しかし、私たちは「子どもたちに緑や森林を身近に感じてもら

う」という共通の目標を掲げることで、一つのワークショップを完成させることができました。

最初に小学校でワークショップを行った際には、子どもたちが私たちの予想通りには動かないことや、そのエネルギーの大きさに圧倒されました。この経験を活かし、中学校でのワークショップでは、生徒自身が自分の身近な環境について考え、話し合う時間を設けました。すると、彼らはすでに身近な環境について一定の知識を持っており、それをどのように活かしていくかを考えることが重要だと気づきました。このように、試行錯誤を重ねながらワークショップを作り上げたことは、私たちにとって大きな挑戦であり、貴重な経験となりました。

カンボジアの現状を知る

私の通っている地球社会共生学部では、東南アジアの経済発展と共生のあり方を学んでいます。これまではデータや写真、映像を通してカンボジアについて学んできましたが、現地に行くことで、これまで知らなかった情報が次々と飛び込んできました。日本からでは見えなかった複雑な社会の仕組みの中で、人々がどのように暮らしているのかを実感することができました。この研修を通して、データや情報だけでは理解しきれない現地のリ

アルな状況を知ることの大切さを改めて感じました。

多様な人々との交流

この研修の大きな魅力の一つは、日本全国から集まった学生や現地の学生と交流できることです。9日間という短い期間で新しい人々と仲良くなれるか不安もありましたが、実際に会ってみると、どの学生も優しく、しっかりとした考えを持っていました。互いに異なる価値観や意見を共有し、それぞれの専門知識を学ぶことができたのは、非常に貴重な経験でした。

また、現地の学生とは、日本とカンボジアの文化の違いや大学の授業スタイル、生活スタイルについて語り合いました。このような身近な話題を共有することで、より深い理解が生まれました。この出会いは、この研修がなければ得られないものであり、今後もつながりを大切にしていきたいと思っています。

今後の目標と研修の意義

今回の研修を通して、「一人で何かを変えることの難しさ」を改めて感じました。しかし、複数の人が協力し、知識を共有することで、より良い解決策を見つけ、持続可能な社会を築くことができるのではないかと考えました。

私は将来的に、この研修で得た経験を活かし、国際的な環境保護の分野で学びを深めたいと考えています。他国の人々と協力し、地球規模の環境問題に取り組む活動に貢献していきたいです。また、次世代の若者たちがこのような研修に参加できるよう、支援団体の活動にも関わりたいと考えています。私たちも「緑の

募金」という団体の支援を受けたことで、経済的負担を軽減しながら研修に参加することができました。このような機会をより多くの若者に提供するために、私は今後も支援団体を支持し、協力していきたいと思っています。

まとめ

この研修は私にとって、ただの学習の場ではなく、多くの人との出会いと新たな発見の場でもありました。実際に現地に行き、自分の目で見て、耳で聞くことで、データでは分からなかった現実を知ることができました。また、異なる文化や価値観を持つ人々と協力しながら一つの目標に向かって活動することで、コミュニケーションの大切さやチームワークの重要性を実感しました。この経験を今後の学びに活かし、より良い未来を築くために行動していきたいと考えています。そして、私たち若者が環境問題に関心を持ち、持続可能な世界を目指して行動することが、未来の社会を変えていく大きな一歩になると信じています。

To my buddy

Thank you for your support during my stay in Cambodia. I am very happy to have been able to work with you as Group C to do so many things. I know it was difficult for both of us to communicate in a language that is not our first language but thank you so much for not giving up and trying to communicate with us until the end. I am glad that we could have a lot of conversations and became good friends, and that I now have a purpose to go back to Cambodia. If you ever come to Japan again, please contact me. I will show you around and teach you many things! Until we meet again, take care.

小中学校における環境教育の重要性と 新たな可能性

三浦 公希

獨協大学 外国語学部 3年



この研修を通して、私は農村部の森林資源の保護には、小中学校に通う子供たちに対する継続的な環境教育と、それを実践する機会を与えることが重要であると考えました。私達が実際に訪れた小中学校は、どちらも農村部に位置しており、豊かな森林資源に囲まれているという環境でした。その中で生活をしている子供達に対してワークショップや植林活動といった環境教育を行いました。森林に興味を持っている生徒が少ないこと、森林に対する意識が低いことが自分にとっては意外なことでした。例えば、授業中楽しそうに植林活動をしているように見えた子供達でしたが、よく見ると昨年植えた木がほとんど枯れてしまっているようでした。話を聞く限り建前上は乾季だからという理由であり、本音は面倒であることがわかりました。

また、農村調査の際に村の子供達20人程度に将来何になりたいかという質問をした際には、ほとんどの子供が医者や教師等の森林と直接的に関係しない職業を希望していることがわかりました。この背景には、給料や森林活動そのものの魅力が低いことがあることが考えられます。実際村人によると、若者のうち60%は学校を卒業後村の外に出稼ぎに行ってしまうそうです。一方で森林に興味はあるか？という質問もしましたが、森林に興

味がないと答えた子供も1人もいませんでした。

森林活動は他の領域の活動と比べると、比較的時間のかかる活動であることは明らかです。例えば木を植えてそれが成熟するためには何十年もかかってしまい、森を作るとなると100年単位の時間が必要となります。それゆえに早期に森林問題に取り掛かる、新しい知識や技術を取り入れることを考慮すると若い世代、とりわけ小中学生を教育することが最も効率的であると私は考えました。

それには継続的な環境教育と実践的な技術を与える機会が必要とされます。現在のカンボジアでの小中学校では、今回私達が行ったような活動はほぼ行われておらず、日本でいうところの部活動のような活動も行われていないようです。つまり学校で得た知識を実践する機会が少ないということになります。これでは森林保全はおろか、他の職業を目指す生徒達にとっても良い環境であるとは言えません。そこで日本における部活動のような課外活動を学校教育に取り入れることにより、子供達にそのような機会を与えることができます。例えば森林に興味を持つ子どもたちに対し、課外活動という形で放課後に植林活動を体験させたり、森林保全に携わる人との交流を促したりすることによって実践的な技術知識を得る

ことが期待できます。また顧問の先生を地域の人々(私達が訪れた村で言えば村長やお母さん達)に依頼することによって、教員の負担を減らすだけでなく、より経験を持った人々からの指導を受けることが期待されます。

この研修を終えての今後の抱負は、教育支援を行う上では現地視察を大切にすることです。当然同じ国、同じ村の学校であっても、それを取り巻く環境は大きく異なります。今回訪れた村においても、多くの子供がスマートフォンでYouTubeを視聴する姿を見かけましたが、それが全ての村で見られるかは定かではありません。より辺鄙な地域では、そもそも電波が整備されていない可能性や、そもそもスマートフォン自体を知らない可能性もあります。それゆえに教育支援を含む国際協力をする際には、実際に現

地を訪れ、その地域特有の問題や環境を考慮していかなければならないことが本研修を経ての抱負です。

Message to my buddy

Dear Rei

Thank you very much during our staying in Cambodia. Thanks to you, we could learn everything about environmental issues in Cambodia. Especially in primary school and secondary school, we could not have conducted our projects without your assistance through interpretation.

Thus, I want to help you in Japan if you are allowed to stay Tsukuba university in Ibaraki prefecture. At that time, I will introduce many Japanese culture and landmark. I hope to be able to meet you again and enjoy Japanese culture.

Best of luck!! Koki Miura



かけがえのない1週間

清水 葉

信州大学 農学部 森林・環境共生学コース 1年



たった1週間程のカンボジア研修を通して、目まぐるしいほど充実したスケジュールとグループワークの渦中で、私は学ぶ時間と考える時間を得ることができた。

たった1週間では、カンボジアという国の一面しか見ることができていないはずなのに、カンボジアが大好きになった。今回の研修は、私にとって初めて途上国を訪れる機会だった。ずっと夢見てきた熱帯雨林を見て、森を学ぶつもりで参加した。しかし、訪れてみると、私の心に響いたのは人だった。研修では、歴史的な背景、社会的、気候的な変化など、様々な要因が人々の暮らしに影響を与えていることを学び、その学びが実感となっていた。しかし、それ以上に、人々が今を笑顔で生きていることが印象的だった。楽しいことばかりではなくても、何の見返りもなくとも、毎日観光客

に笑顔で手を振り返している人々がすごく温かかった。私は今まで未来ばかり見て生きてきたから、このカンボジア研修に参加できているのかもしれないが、幸せいっぱいの今を生きることの尊さも忘れたくないと感じた。カンボジアの人を知れば知るほど、自分はどうだっただろう、この素敵な子供たちの将来はどうなるのだろう...と、自分に問いかけるようになった。



写真2 小学生とリザ



写真1 トンレサップの森

また、1週間とは思えない濃厚な時間を素敵な仲間と過ごせたことに大きな意味があったと思う。様々な大学から来た研修生は、いろいろな背景や夢を持ち、しっかりと努力できる先輩たちだった。メリハリのある活動、発言を裏付ける証拠や事実確認を怠らないこと、日々の努力を積み重ねること...など、先輩の姿勢には私に足りないものが詰まっていたと感銘を受けた。また、グループワー

クの中では、コミュニケーションの壁や、しっかりと考える性格をもつ班員同士の意見のぶつかり合いもあった。案出しや議論を楽しめる空気づくり、意思疎通のサポートに私なりの全力を尽くしたつもりだったが、スムーズとはいえない活動だったと思う。それでも、最後まで突き詰めて話し合い、環境教育や農村調査に取り組んで、やり遂げた達成感をグループCで共有できたことは自分の宝物になった。



写真3 グループC

今回の研修を通して、本当に様々なことを学ぶことができた。進路や具体的な目標が定まったわけではないが、研修の経験が様々な場面で役に立つことは間違いないと思う。また、心に決めたことが2つある。1つは、自分自身の選択を信じて、全力で取り組んでいくこと。農家や廃棄野菜の現状を知って、ゼロから団体を立ち上げて、人をまとめて、仲間と勉強し成長できる方法を考えて...人や地

球の役に立つ活動とか、そんな理想に関係なく課題だらけの日々から抜け出したつかの間の時間だった。そして、たとえ途方もない道のりでも、心からやりたいと思う自分の情熱と行動は、自分で応援できるようになりたいと思った。この研修で学ぶ過程と学ぶ姿勢の大切さを知った。日々の学びと環境のありがたさを知った。覚悟を決めてやっている時点で正解に違いないと思えたし、今できることに全力を注ごうと改めて思った。

未来の自分へ、「あなたは、学生団体”あるとない”を、やり尽くしましたか」もう1つは、あの景色を忘れずに生きていきたいということ。カンボジアの人々の生きざまを垣間見て、私はどこか解放感と責任感を感じた。どんな将来が自分を待っていたとしても、自分の置かれた場所で生きる私の頭の片隅にカンボジアで感じたものを留めておきたいと思った。そんな、かけがえのない1週間だった。

最後に、この素晴らしい機会をくださった関係者の方々、緑の募金をくださった皆様、そして最高の仲間たちに深く感謝を申し上げます。

Message to our buddy

It was amazing to meet you. I am going to see you again somewhere, so let's keep in touch and let me know anytime! My experience in Cambodia was meaningful totally thanks to your word, experience and passion.

Thank you and I wish you the best of luck.



Actions speak louder than word

SONG Wei

The University of Tokyo, Dept. of International Studies, Master 1



1. What I have learned?

1.1 Environment Education

For environmental education, our group ultimately decided on a "Leaves Collage" combined with an environmental knowledge course. The idea is to have students create nature-inspired art using leaves.

Firstly, when the target audience for environmental education is elementary school students, I believe that the "fun" aspect of the course is the most important and fundamental requirement. For young children, the allure of knowledge is far less appealing than a blank sheet of paper and a few crayons. Only when children are having fun will they have the extra mental energy to engage with the course content and explore the underlying meaning of the course design on their own.

Secondly, when the target audience is middle school students, their comprehension and hands-on abilities are much stronger than those of elementary school students. Therefore, it is possible to include some course content in addition to entertainment. However, the main focus of environmental education should still be on "fun," and the course format should ideally be interactive. For example, in this course, we encouraged students to brainstorm and think about the "uses of palm trees," which resulted in many interesting answers. Moreover, students were able to create their artworks based on the course content during the following creative session, which was something we hadn't

anticipated.

Additionally, we found that when creating leaf collages, older students tended to prefer completing their projects alone, whereas younger students leaned more towards teamwork. Whether in elementary or middle school, we were surprised to find that students' creativity and comprehension were much stronger than we had expected. The children were able to produce very exquisite and unique works in a short amount of time. This reminded us that in future content design, we should provide more freedom to the children.

1.2 Tree-planting

Continuing with the tree-planting session, I noticed that the difference between elementary school students and middle school students became even more apparent. After completing the environmental education for elementary students, we took the local children to the tree-planting site. We formed several groups, standing in circles, while staff from ERECON provided instructions. Next, it was the Japanese students who began planting the trees. Although a few local elementary students participated, their numbers of student joined were limited, and most were not familiar with the specific steps. The rest seemed rather confused and unsure of what to do. However, this is not surprising. **Having grown up surrounded by forests, how could they have known that trees need to be planted by people?**

Things were quite different when it came to the middle school students. This change could

be attributed to the proximity to the city or the local community's strong emphasis on tree planting and the existence of large-scale demonstration fields. When we began investigating the survival rate of the trees, a few middle school students spontaneously guided me through checking each tree and taught me how to determine whether a tree was alive or not. During the tree-planting session, they were familiar with each step: digging the holes, moistening the soil, placing the saplings, filling in the soil, watering, and securing the trees. They could complete the entire process without our assistance.

The most important aspect was the joy we felt while planting trees together with the children. Every time we finished planting a tree, we would gather our hands and wash them together with the water used for planting. In those moments, it truly felt like our hearts were connected. That day, we planted six trees together and then played soccer. **I believe that sunny morning will always have a special place in my heart in the days to come.**

1.3 Rural Survey

Finally, let's talk about the rural survey, which was my main responsibility in our group. First of all, regarding the questionnaire design, our current version seems somewhat simplistic. We didn't prepare appropriate follow-up questions for some possible responses and didn't tailor the questions for different age groups or economic levels. For example, villagers with higher economic status might have more knowledge about policies and education. This oversight caused some delays during the interview. More specifically, two questions in the questionnaire asked villagers to evaluate certain matters. In retrospect, this approach wasn't rigorous. Instead of asking villagers for their attitudes, it would have been better to ask more objective and quantifiable questions, allowing us to conduct more

standardized evaluations later.

Next, I learned some valuable techniques for questioning. First, when interviewing in villages, villagers often gather together. If we interview them as a group, their answers can easily influence each other. Additionally, when asking slightly sensitive questions, such as whether they have collected non-timber forest products (some villagers believe this is not allowed by the government), some interviewees may choose to conceal the truth. Professor Mihara also mentioned this point. My solution is that in future encounters with such questions, we could ask villagers about their neighbors' behavior or let them answer based on their observations. This approach can help alleviate some of the villagers' concerns.

Moreover, it is crucial to adjust questions in real-time based on the responses. Initially, all our questions focused on non-timber forest products. However, some villagers were full-time farmers. When asked about non-timber forest products, their answers were usually brief and superficial. But once we asked about agricultural production, they eagerly shared their experiences in depth. **Sticking rigidly to the original plan may not always be a good idea.**

Last but not least, I found some methods to build rapport with interviewees and improve the quality of the interviews. For example, asking for the interviewees' names and ages before starting the interview, and wishing them good health and longevity at the end, can make a significant difference.

1.4 Deeper Takeaways

A deeper reflection on my experience centers mainly on interpersonal communication. Starting with the interaction with local children, each of our groups had only one Cambodian student to help with translation. Therefore, during the environmental

education sessions at the school, we spent a significant portion of the time interacting with the children without a translator. **In such moments, smiles and hugs became our sole means of communication.**

When it came to the tree-planting session, how could we convey the importance of planting trees to the children? **I believe that our own actions served as the best expression.** It was only when we, as outsiders, picked up the hoes, held the soil, kneeled on the ground, and put our utmost effort into planting each tree, that the local children truly understood the importance of these saplings and what they symbolized. This motivated them to join us and continue taking care of these fragile lives even after we left.

During the rural survey, communication was also a crucial aspect. However, compared to the school setting, we had more assistance from Cambodian students and staff, which helped us overcome language barriers, express our ideas, and understand the villagers' feelings as much as possible. At this point, **I gained a deeper understanding of "human commonality."** Whether in the skyscrapers of Beijing or the rural areas of Cambodia, young children wish for more playtime and less academic or work-related hardships. Middle-aged parents hope for stable incomes and good education for their children, so they do not have to relive their own living conditions. Meanwhile, elderly individuals hope for good health and happiness for their children. Our task is to discover the specific reasons hindering the villagers from achieving these aspirations through our questions, only then can we truly realize the ultimate goal of "development."

2. Future Plans and Aspirations

During our rural survey, we stumbled upon an intriguing phenomenon. When asking

villagers to compare their current living conditions with the past, a significant number of them reported that life was better in the past. The reason given was that the use of currency was not as prevalent back then. Nowadays, money is needed for almost everything, which places a lot of pressure on the villagers. This finding conflicted with my previous understanding. I once believed that the essence of development was to gradually extend the rules and regulations of the developed world to the undeveloped world, thereby improving the quality of life. The currency system, undeniably, is a core component of the developed world. However, the rural survey results showed that with the onset of monetization, people shifted from traditional trading methods, decreasing transaction efficiency and increasing life pressure. This led some to acquire wealth by selling forest resources, ultimately causing a drastic reduction in forest areas. Conversations with Professor Mihara confirmed this complex relationship between monetization and deforestation.

Before conducting the rural survey, I wouldn't have known how intricately these two factors were connected. In the future, I plan to continue focusing on this field and attempt to conduct related research. I also aim to seek more opportunities for field surveys in developing countries, to accumulate a deeper understanding of different societies and cultures.

3. Message to Japanese Trainee

First of all, I want to express my heartfelt gratitude to all the fellow students and teachers who were part of this journey. Thank you for your patience and understanding with my poor Japanese. I know that it has caused many inconveniences during the trip, I feel truly grateful for your understanding.

Next, I want to give a shout-out my group members, Yo, Kana, and Masa. Group C is the best, no question about that! Our group had one extra member compared to others, and also my limited Japanese proficiency initially made our discussions less efficient. However, I know it from the bottom of my heart that each one of us was truly interested and had high expectations for this activity. Despite the challenges in our discussions, we never gave up but instead worked hard to design solutions. Yo is a really kind and warm-hearted person. Although she just started university and doesn't have much research experience, she is very empathetic and approachable. She was really popular among the children during our visits to the elementary and middle schools. She was also very diligent, purchasing the necessary tools for environmental education before the trip and practicing the lesson content with Nanan on the bus. Yo always came up with great ideas at important moments. During the rural survey, she noticed our efficiency was low and suggested we split into two groups, allowing us to successfully collect over 20 responses. During the presentation preparation, she proposed using a scatter plot to display data, which was later adopted in our final report with great result. Kana is the most generous member of our group. From the pre-trip meetings, she took on the responsibility of recording and organizing the discussion content after each meeting. Often, our discussions would diverge, but she helped us stay on track and move steadily toward our goals. In critical moments, she provided a great sense of reassurance. During the middle school environmental education session, we ran into a time management issue, and Kana's part had very little time left. She decisively gave up her prepared content to ensure our group met our pre-set goals. During the final presentation preparation, she

finished her part of the PPT early and then helped the rest of the group integrate and format the slides. When Yo's part encountered an unexpected issue, Kana even helped out without finishing her own lunch. I am deeply grateful for her selflessness and contributions. Masa was the group member I communicated with the most during this journey. He is meticulous, optimistic, and genuine. Throughout the trip, he created countless illustrations for our environmental education and rural survey materials. When our discussions reached a dead-end, he patiently worked through potential issues with me step by step. After everyone else returned to rest, he continued to complete his tasks. During the rural survey, he consistently supplemented the interviews with critical questions and contributed his observations during the analysis phase. We often ate together in the last few days, discussing cultural differences between China and Japan. I remember he enjoyed the multiple toasts tradition the most, and I learned from him the Japanese phrase for "bittersweet," which is "ほろ苦い." On the last day, we sat on the floor at Phnom Penh Airport, reminiscing about the past week. I wish this journey could have lasted a few more days.

As time went on, we adapted more to each other's ways of working, and the efficiency of our discussion improved significantly. During the preparation for final presentation, everyone stayed highly focused, providing constructive suggestions and offering help when others faced difficulties. At that moment, I felt we could accomplish anything.

Lastly, I would like to extend my heartfelt thanks to Ueno, Aoki, Nanan, Sreylen, and William. Every time we had a meal, Ueno-san would serve everyone first and pass the dishes to people who were farther away. He would only start eating his own meal after everyone

was settled. Even during brief stops on the road, he would find a place to work to ensure our plans went smoothly. Aoki-san reviewed our plans before we went to Cambodia and provided valuable advice based on her past experiences. After arriving in Cambodia, she assisted us in preparing the necessary items and coordinated with the local villagers to ensure the smooth implementation of our plans. Nanan, the most crucial member of our group, has been helping us with translations and keeping the atmosphere lively throughout

the trip. She also provided suggestions for our plans based on her life experiences in Cambodia. During our rural survey, Sreylen helped us communicate with the villagers and gathered potential survey subjects. William explained Cambodia's history to us throughout the journey, and we often discussed topics related to Cambodia and China, becoming good friends after the trip. There are so many more people we need to thank along the way. Without all of you, we couldn't have accomplished any of this.



Connect to the future through dialogue

高橋 奈々
北海道大学 農学部 4年



Through this training, I learned that talking with local people is essential to promote environmental conservation, and that it is important to have a multifaceted perspective when we consider environmental issues. In the case of deforestation in a village in Cambodia, it seems at first glance that it is caused by the excessive consumption of forest resources by the villagers for their livelihood. However, after talking with the villagers, it was found that the amount of forest needed for the villagers' daily lives has increased due to restrictions on logging, and there are no major problems with the supply of timber. In other words, the villagers are self-sufficient in their lives. It was found that the main cause of deforestation was logging for agricultural land development. In addition to daily necessities, the villagers were expanding their agricultural land to cover new expenses such as their children's education and mobile phones. Another point to note is that many villagers have no choice but to engage in agriculture as tenant farmers to earn an income. Although agricultural land development itself is not bad, if it goes too far, forest resources will decrease rapidly, and as a result, the benefits of the forests that the villagers have been able to use sustainably may be lost. Behind this situation is thought to be the economic factor that agriculture provides a more stable income than selling timber or fruit. By digging deeper into the problem, we can see that simply stopping deforestation and promoting tree planting will not lead to a fundamental

solution. The background to deforestation is closely related to changes in land use and economic circumstances, so in order to advance environmental conservation efforts, it is necessary to understand the local socio-economic situation and seek sustainable alternatives. For example, by introducing appropriate forest management methods, it may be possible to create a system that can secure income for residents while maintaining the forest. Another way to stabilize income without relying too much on agriculture is for the government to support villagers in improving the quality of commercial crops or taking up other occupations. Until now, I have studied environmental issues superficially, but I have keenly felt the importance of understanding the social and economic factors behind the problem. On the other hand, I thought that by directly listening to the voices of local people, we could find clues to the essence of environmental problems and clues to solving them. Land development itself cannot be said to be evil, but the earth is rich in nature, and not only humans but also diverse living things live there, and the ecosystem is made up of their interactions. Living in urban areas in Japan, it is difficult to appreciate the benefits we receive from nature, but Japan's abundant water resources, food resources, and beautiful scenery are all built on biodiversity, and the same is true in other countries. Therefore, I strongly felt that it is urgent to conserve nature before the balance of the ecosystem is irreparably damaged.

Through this training, my desire to "protect the nature of the Earth" that I have had until now has become even stronger. At the same time, I felt that to achieve environmental conservation, it is necessary not only to protect nature, but also to deeply understand how local people, governments, and the international community are involved and what is causing environmental change. This is by no means an easy task, and it may be practically impossible to protect all nature on Earth. However, we need to aim to solve more fundamental problems rather than just superficial efforts in environmental conservation, as represented by goals such as "30by30" set out in the Montreal Convention. The cause of deforestation is not simply intentional, but in many cases, it can be said to be the result of choices people have no choice but to make to survive. Therefore, I believe that the essence of environmental problems is not "destruction itself" but "why destruction occurs". In the future, I would like to not only continue my research on environmental conservation, but I also clarify the issues that each person has in the field and seek concrete solutions. To do this, we need to work with policymakers, NGOs, and research institutions to find ways to balance sustainable development and environmental conservation. In addition, I believe that the need for building business models that can secure income while properly managing forest resources will increase in the future, so I would like to always study and gain experience and actively participate in activities at the field level. As I

mentioned, I have been conducting research at university simply with the desire to protect nature, but I felt that this alone is not enough to solve environmental problems. In the future, I would like to contribute to nature conservation with like-minded colleagues, visiting various places and talking to local people, aiming to solve more fundamental problems. I also believe that it is important to widely disseminate the knowledge gained in the process and create an opportunity for many people to take a deeper interest in environmental issues. Although it is a field that will never end, I would like to work hard to aim for a future where this beautiful earth will remain for future generations and everyone can live happily.

Message to my buddy, Rei

First, thank you so much for everything over the past week. From our very first group activity, you were cheerful and kind, making the experience truly enjoyable. I really appreciate your help in telling our ideas to the children during the school workshop! During the rural research, you carefully explained each villager's story to us, which was incredibly helpful. Thanks to you, we were able to gain many valuable insights. Even on the bus, you told me about your family and Cambodian culture, which made the trip even more enjoyable. I hope you have a wonderful time in Japan next time! Thank you again for everything, and I look forward to seeing you in Cambodia and in Japan again!

冒険隊のカンボジア旅

王 嘉鈺

北海道大学大学院 農学院 修士1年



2月13日 カンボジア冒険隊10人が成田国際空港に集合し、カンボジアへの探検が始まった！

2月14日 バレンタインデーに冒険隊はプノンペン国立博物館の訪問から最初の1日の日程を始めた。博物館でヒンズー教の文化と仏像の由来や異なる神像の意味などを学びながら、この国の歴史におけるキラキラと輝かしい時代を感じることができ、深く勉強することができた。しかし、その後訪れたキリングフィールドでは、カンボジアの人口の4分の1が虐殺されたという証拠を見て、この国の発展の歴史に暗い時代があったことも知り、心が重くなった。また、冒険隊は **Khmer Green Charcoal Co., Ltd.** を訪問し、エコ・チャコール・ブリケットの製造ラインを見学した。ココナツの殻と木炭のカスで100%のリサイクルし、化学薬品を使わず、煙や火花を出さずに3時間燃焼する、実用的で使いやすい形のチャコールが製造されていた。**Khmer Green Charcoal Co., Ltd.** は近代的な加工と革新的な技術を組み合わせることにより、木炭に代わる高品質で持続可能な代替燃料を製造している。冒険隊の隊員は、途上国において循環型社会と持続可能な発展へ貢献する企業の姿と努力を目にし、素晴らしいことだと感じた。

2月15日&2月17日 冒険隊はグループ

A、B、Cと三つのグループに分かれて、小学校と中学校の学生への環境教育のワークショップを行った。小学校では、Aグループがレクチャーパートを行い、クイズを通し生徒たちに問題意識を持たせたあと、Cグループの内容を支援した。中学校では、生徒たちに現在の森の様子と将来の森の姿を想像して「絵」を描いてもらった。生徒たちはとてもフレンドリーで、気さくで、かわいらしく、才能に溢れていたと感じた。描き終わったら、生徒たちにクラスの前に来てもらい、グループ毎に描いた絵について簡単に発表をしてもらった。生徒たちは私の想像以上のレベルで、新しい物事に対する受容性と新しいことを学びたいという意欲、絵を描く才能や自分の考えとアイディアを持っていた。将来、彼らの絵に書いてあるように、緑がもっと多くなり、野生動物も多くいる自然環境を実現させるために、生徒たち自身が努力してくれると期待している。

2月16日 冒険隊はコンポンチャム州のバンブーブリッジと **Knapor** コミュニティフォレストに行った。**Knapor** コミュニティフォレストは、地域コミュニティの住民が政府や企業からの補助金をもらい、自然資源の豊富な森林の管理をして、そこから得られる薪や果物などの産物を売ることによって収益を創出しているということ

が分かった。

2月18日冒険隊がグループ別で Kna Krao 村において持続可能な森林資源管理の仕組み作りを目指した農村調査を実施した。グループ A はあちこち見えるタバコなどのゴミ問題を切り口に、森林資源に対する認識を調査した。住民への聞き取りによって、ゴミは分別せずに一斉に自分の畑の隅あるいは家の前で燃やしていくことが分かった。森林や自然の中でプラスチックの問題がとても深刻であり、単にプラスチックの処分方法がわからないため、恣意的に捨てられる事例が多いようである。グループ A は、現地住民のゴミ処分に対する不十分な意識と現地のごみ収集と処分のシステムが完備されていないことが課題であると考察するとともに、それらを解決するのは非常に難しいことだと感じた。

冒険隊のカンボジア旅は終了したが、カンボジアのような途上国の人々をより良くするために自分の力を貢献し続けるという決意と意志を私は今も持ち続けている。今回の活動の中で、環境教育の実践と木を植える経験を得ることができたのは、現地の森林の再生と保全においてとても有意義なことだと考える。ただし、単なる 9 日間でカンボジアの全体像をみることができなかった。とても短かったので、現地に既存している問題に触れるのもまだ表面的なことに過ぎない。多様な問題をどう解決すれば良いのか、どのような解決策が効果的であろうかという質問に深い無力感がある。しかし、今回カンボジアで様々な経験ができたことは、

私が国際協力事業を経験する良い機会となり、国際 NPO 団体の仕組みもよく理解することができた。カンボジアで体験したこと、実感したこと、考えたこと、発見したことはとても貴重なものであり、今後も途上国を対象とした援助プログラムへの参加機会があれば、ぜひ、今回の経験を活かしていきたいと考えている。

Message to my buddy

Dear Niza, Chamnan, and Rei:

This is Michelle. It has been a while since we left Cambodia. How is everything going? I hope you are doing a good job. I just want to say something and to tell my feelings to you. Firstly, thank you all for joining with us in this meaningful program. We had a very good time together. It would be the most memorable experience in my life so far. I also appreciate your warm welcome and help with translation. Through this experience, I realized that if we cannot talk to local people well, we will fail to do anything. If I want to do something meaningful to help this area become better than before, I need to know what the local want at first. But if I cannot communicate well with local people who do not speak English or even cannot write, people who study in specific fields and can speak both English and local language will play the most important role. You guys are the local human resources and you will be the future of Cambodia, so I hope you can do your best to study hard and well to help construct Cambodia better and stronger. If there are anything you want me to do, feel free to contact me. Best wishes and best regards! Michelle

カンボジア探訪記 ~わくわくポイント付き~



渡戸 崇弘
東京農工大学 農学部 2年

1. 研修で学び得たこと

今回の研修を通して、森林の減少を抑え、増加に転じていくためには、森林資源が人や社会にとって有益にはたらくことを積極的に伝えることが重要だと感じた。単に自然を守るために森林管理を行うことももちろん大切である。しかし、Khmer Green Charcoal Co., Ltd.の訪問や農村での聞き取り調査を通して、自然だけでなく人や社会も「環境」を構成する要素であると実感した。それらと森のつながりを意識することで、現地に住む人々がより能動的に森林管理を行えるようになるのではないかと思った。

また、現地の子どもたちへの環境教育や最終発表を通して、国際的に協力して持続可能な森林管理を行う大切さも学んだ。異なる価値観を持つ人が現地の現状を体感したり、現地の人々と話し合ったりすることで、持続可能な森林管理の実現に向けたアイデアが生まれるのではないかと感じた。実際、僕のグループは最終発表でゴミを用いた野生動物アートの製作を提案したが、このアイデアは村の子どもが遊んでいた凧がペットボトルなどのゴミでできていたことから着想を得た。他にも、子どもたちの植樹の様子や村の人々のごみの処理方法など、現地に訪れてはじめて知ったことがたくさんあり、とても貴重な経験になった。

2. 実習を通した今後の目標

今後の目標は、今回の経験を活かして海外留学をより充実したものにする事だ。僕は10月から約半年間、マレーシアに留学する。マレーシア留学に向けて、東南アジアの風土や文化にふれることがこの研修に応募した理由の一つだった。留学先では主に森林生態系や野生動物の保護・保全について学ぶ予定だが、その際にマレーシアの森林の状況と今回の研修で学んだカンボジアの現状とを比較し、同じ東南アジアに属する国どうしでどのように異なるのかについて着目しながら自分の見識を深めていきたい。

また、現地の学生と積極的に交流するために、英語とマレー語のスキルを鍛えていきたいと思った。RUAの学生を含め、研修生の英語力が高く、自分の英語力はまだまだだと痛感した。特に、スピーキングが苦手だと感じている。最終発表で、英語でのプレゼンテーションこそ難なく話すことができたが、その後の質問応答にうまく対応できず、苦戦した。僕もスラスラと話せるように、自分の好きな話題を中心に英語に触れる機会を少しずつ増やしていきたい。加えて、カンボジアの子どもたちに簡単なクメール語で話しかけたら喜んで返してくれ、現地の言葉でのコミュニケーションも大事だと思った。留学先ではマレー語の授業もあ

ると聞いているので、そのためにも少しずつ習得したい。

そして、カンボジアやマレーシアだけでなく、その後も積極的に国際的な経験を積んでいきたい。ゆくゆくは、どうすれば人と自然の共生を実現できるかについて、子どもたちに考えてもらうきっかけを与えられる人間になれたらいいと思っている。

3. 個人的わくわくポイント

ここからは、今回の研修で特に楽しかったことをいくつか紹介する。

一つ目はトンレサップ湖のクルーズだ。カンボジアの雄大な自然を楽しめただけでなく、現地の水上集落や漁の様子も見ることができたのでよかった。また、ホシバシペリカンやインドブッポウソウなど、日本ではまず見られない野鳥を数多く目撃し、動物好きな僕にとっては夢のような時間を過ごすことができた。

二つ目は、生物多様性保護アンコールセンター（ACCB）に訪れたことだ。センター内にはビロードカワウソをはじめカンボジアの希少な動物たちが飼育されており、見学中は興奮しっぱなしだった。

また、センターに行ってはじめて知った動物も多く、そういった動物たちが絶滅の危機に瀕していることを世界中の人々に知ってもらうことの重要さもあらためて感じた。さらに、カンボジアでの野生動物保護活動の実情を知れたのもよかった。ここでの経験も今後の国際的な活動に活かしていきたい。余談だが、ERECONの方によると、この生物多様性保護アンコールセンターへの訪問の決め手は、僕が野生動物好きであることだという。この研修に参加したい方は、面接のときに自分の興味があることについて熱く語ることをおすすめする。その分野が研修内容に盛り込まれるかもしれない。

上記以外の場所でも、日本にはいない生き物をたくさん見ることができ、非常に充実した研修だった。

4. Message for our buddy

Hi Niza. How are you doing? Your translation of the environmental education and rural survey was helpful. Thanks to you, this training was much more fulfilling. If you visit Japan, let's do muscle training together!



私はなぜ環境問題に取り組むのか



周 文佳

東京大学 工学部 化学システム工学科 2年

壮大な問いのようなタイトルになってしまったが、緑の国際ボランティア研修で私自身がこの問いについて考えることが幾度もあったので、極めて個人的な見解を示したいと思う。研修から少し時間を置いて、非日常の高揚感というノイズの干渉がない今、書いている。

中高生の頃から、私の関心の根底にはいわゆる社会課題とされるテーマが一貫してあった。ウルトラマンなどのヒーロー作品で育った自分にとって、誰かの、困っている人の役に立つことが最もかっこいいエゴであり、生き方であり、社会課題の解決を生業とする大人になりたかった。様々な社会課題がある中で、気候変動などの環境問題に軸が定まっていたのは、自然科学的な知と、社会システムや人を動かすことの両輪が不可欠で、やり甲斐を感じたからだだったと思う。それから4年ほど経って、様々な知識を得て、経験をして、少し環境問題への認識や理解は深まって、大学の勉強も専門課程に突入した。けれどそんな最近の私は、「なぜ環境問題に取り組むのか」について、わからなくなりつつあった。言葉を変えて言えば、現実のシビアさに希望を持てなくなっていた。専門課程に入り、技術開発や社会への普及の難しさを切り込んだ角度から理解できてしまい、国が掲げるカーボンニュートラルのための技

術などの言葉の浮かれ具合に焦り、無関心な世の中に訴えかけることに無力さを感じた。エネルギーや資源、産業など、サプライチェーンの、消費者には見えない部分の現場を見たことで、世の中の仕組みが変わるってこんなに難しいことなのか、と痛感してしまった。ニュースで連日報道される、トランプ大統領の就任や、環境問題などいわゆるリベラルなテーマの世界的な勢いの減退が、この絶望感に拍車をかけた。私はいい意味でも悪い意味でもリアリストなので、少しでも可能性があるならば諦めず駆け抜けよう！といったポジティブな姿勢を積極的に取れない。日々の学業で消耗していて余裕がなかったこともあるだろう。とにかく目の前の毎日のやるべきことに必死になることで、この不安と絶望感から目を背け、「なぜ環境問題に取り組むのか」という問いに蓋をしてきた。

そんな時だった。この研修に応募したのは。カンボジアに行けば、上記の問いに対して何か今の自分なりに答えが出せるのではないかと、消えつつあったやる気の炎が戻ってきてくれるのではないかと、という淡い期待もあった。

まず、環境問題というものが、大きな社会的な、教科書的な課題から、カンボジアで出会った大切な人達の現実として落とし込まれた。私たちの身の回りにも

カンボジアが生産や製造に関わった製品はたくさんあって、それらに起因する環境問題は教科書的事実として聞いてはいたけれど、より生身の現実として立ち現れた。気候変動の激化による洪水被害を受けるような東南アジアの水上集落の人々の暮らしも、論文レベルで彼らが川辺を離れないというような話は知っていたが、実際そのような暮らしを目の前にし、体感すると、その事実は動かぬ現実として実感できた。農村部から都市部の大学へ進学したバディ達の人生の話もとても等身大で、彼らは淡々と話すけれど、実際に自分の故郷である農村部に迫る気候変動の影響を懸念している彼らが環境関連の専攻を選ぶことの説得力は私たちとは大違いだった。ただそうしたことを知って、かわいそうだとか、そういう気持ちは抱かなかった。どちらかといえばカンボジアの人々は環境問題を問題として憂慮したり不安視したりしていないように思えた。まだ問題の程度がそこまで緊急性を要していないからという点もあるだろう。だがもっと大きな理由として、彼らにとっては自分たちの身の回りの生活の問題であり、例えば千葉で暮らす私の家の水道管が壊れてしまうような、そういう感覚だからなのではないかと思う。勝手なステレオイメージで、自然に依存して生活している人々は環境問題への意識も高いものだと思っていた。そうではない。彼らにとっては「問題」というような、教科書で教え込まれるような知識レベルの話ではなく身近な現実の話題で、だからこそその原因だとかシステムだとか対策手法みたいなものを想像したりすることはないのではないか。日本でもそうじゃないか。自分の家の水道管が壊れ

ても、上下水道インフラの老朽化のような社会のマクロレベルの課題をなんとかしたいと思う人はごく一部だ。あんなにも東京の暮らしの当たり前とは異なる生活を目の当たりにしたのに、人間はどこで暮らしていたって、大きくは変わらないのだなという感慨に落ち着いている自分がいる。ものすごくエッセンスだけを抽出すれば、人間は自分たちの暮らしを愛していて、身の回りの人を愛していて、日々を楽しく生きることを最優先とするのだ。そしてその部分と所謂環境問題が交差した時、人々は適応しようとしたり、一部の人々は緩和策を考えようとしたりする。これはとても自然な流れだと思った。

じゃあ交差しなかったら？交差していることを認識することができなかったら？そうして対処できずに大変な目に遭うのも自然な流れなのだろう。だけどそうやって諦められる人と諦められない人がある。私は諦められない。それは人間の在り方として自然極まりない動機に基づいている。そう、自分が美しいと思うもの、大切にしたいこと、幸せだと思ったこと、それらが全て環境問題と強い因果で結びついているからだ。「困った人を助けるヒーローになりたい」という、自分自身が比較的安定した、安全な立場にいないと抱くことのできない脆いエゴではなかったのだ。

トンレサップ湖で体感した世界は、私が生まれてから感じたことのない美しさと尊さを放っていた。シェムリアップの中学校で出会った11歳のマッカルの瞳は、誰よりも輝いていた。そしてマッカルンがくれた、信じられないくらい空間把握能力を感じられる、彼の木造の実家

の絵は今まで見たどんな画家の絵よりも素晴らしかった。カンボジア研修を共に過ごした人々、出会った人々、交わした言葉、それらは大袈裟に言わずとも、私の人生の中で最も大切なものの一つとなった。飽き性で、大抵のドラマやアニメの展開にうんざりしてしまう、偏屈で生意気な私の人生で、そんなものが更新されることは頻繁ではない。というか、数年に一度、あれば幸運なくらいだ。金銭で買えるのなら苦労しない。人間は確かに生きることが最重要事項だけれど、「大好きな人や場所のために環境問題に取り組む」というのは、上述したように、「身の回りの人を愛し、日々を楽しく生きることが最優先とするのだ。」この自然な理論から導かれる動機なのだ。

こんなことを誰もが思えば。カンボジア製の商品を買うときに誰もがその背景にある人々や環境問題に思いを馳せれば。ひいては電力やガスのことを心配するときに気候変動まで考えを巡らせれば...な

んて願うことはしない。きっと誰しも大切なものや、価値を感じることは違う。日々頭を占めることは結局、小さな自分の周りの世界のことだ。だけど完全に分かり合えない話でもないという期待もなぜか心の中に無理なく残っている。遠い世界の実感しにくい話だけれど、人生の下地として、無機質な研究室に向かう私を温め、励ましてくれる記憶がある。そんな記憶を持つ人が動く。世界に働きかける。その集合はきっと大きな波になる。私はその波を強く後押しする歯車になりたい。疲れて帰ってきた私でもそう思っているのも、きっとこれはカッコつけではない。

Messages to Rei

Rei, it's been a real pleasure meeting you!
Thinking of you working hard in Cambodia
makes me work hard too! See you again.

សូមអរគុណ



Participating International Green Volunteer Training

CHEN Maniza

Royal University of Agriculture, Faculty of Agro-Industry, Grade 2



Introduction

From February 14 to February 20, 2025, I participated in the International Green Volunteer Training Cambodia. The training program brought together a diverse group of volunteers to engage in environmental education projects. The purpose of this training was to enhance participants' skills and knowledge in sustainable practices, raise awareness of environmental challenges, and promote environmental issues and education. This report details the activities, objectives, and outcomes of the training program.

Objectives of the Training Program

The primary objectives of the International Green Volunteer Training were as follows:

1. Provide Practical Environmental Training: Equip volunteers with hands-on experience in environmental conservation activities, including tree planting, sharing the experience about how people live here.

2. Raise Awareness of Local Environmental Issues: Educate participants about Cambodia's specific environmental challenges, such as deforestation, waste pollution, and the loss of biodiversity.

3. Foster Cross-Cultural Cooperation: Promote collaboration among international and local volunteers, enabling the sharing of knowledge and experiences in tackling environmental problems.

4. Promote Sustainable Practices: Encourage the adoption of eco-friendly habits and sustainable practices, both during the training and in everyday life.

Training Activities

Throughout the training, participants engaged in a variety of activities designed to teach both theoretical and practical approaches to environmental conservation. The key activities included:

- Workshops

Training began with first discussion in Royal University of Agriculture where participants learned about the specific environmental issues facing Cambodia. The topics covered included the impact of deforestation on biodiversity, plastic waste management, and sustainable agricultural practices. These sessions provided a strong foundation for understanding the environmental context in which we would be working. We also went to Sraesom Thmey Primary School and Popel Secondary School to do our workshops such



Photo 1 Group A

as planting trees, sharing environmental knowledge with students, and learning back about their environmental issues. The workshop at Knapor Community Forest was conducting survey for Carbon Storage. It was so amazing because I got to learn about the tree more, especially, how the tree gives such a huge benefit to us. All volunteers were active on conducting rural survey at Kna Krao Village (Promoting Forest Resources Conservation, Reforestation Activity, Sustainable Forest Resources Utilization) and villagers being approachable to us. On the last day we also had final presentation with our topic (Promoting Sustainable Forest Resource Management in Cambodia).

- **Tree Planting and Reforestation Efforts:**
A significant portion of the training was spent on practical conservation tasks, such as planting native trees in degraded forest areas. Volunteers worked in groups to plant trees. This experience taught us the importance of forest restoration and how reforestation can help mitigate climate change.

- **Waste Management Initiatives:**
Cambodia struggles with waste management, especially in rural areas. During the training, we participated in a waste management workshop that covered topics such as recycling (took leaves that fell off the tree for drawing), composting, and waste-to-energy initiatives. This activity helped to raise awareness of the growing issue of plastic pollution and the need for proper waste disposal methods.

- **Community Outreach and Education:**
Volunteers conducted educational workshops for children and adults, teaching them about the importance of reducing waste, conserving water, and protecting local wildlife. These outreach activities were aimed at fostering long-term environmental consciousness

within communities.

- **Cultural Exchange and Team Building:**
The training program also included team-building discussion sessions and cultural exchange activities, where participants from Japan and Cambodia shared their experiences and knowledge of environmental practices. Volunteers went to many places for having more beautiful memories such as Angkor Wat, Tonle Sap Forest and Fishery community, Angkor Center for Biodiversity Conservation. This aspect of the training helped strengthen international cooperation and encouraged the exchange of ideas and strategies that could be applied in our home countries.



Photo 2 Our selfie

Outcomes and Achievements

The International Green Volunteer Training in Cambodia led to several positive outcomes, both in terms of environmental impact and volunteer development such as Environmental Contributions, Educational Outreach, Volunteer Skills Development, and Cross-Cultural Collaboration.

Conclusion

The International Green Volunteer Training in Cambodia was an incredibly valuable experience for us all involved. The training equipped volunteers with practical skills in

environmental conservation, fostered cross-cultural collaboration, and made meaningful contributions to the local community and environment.

Message

Thank to ERECON and Our Japanese Friends (Tomodachi) hope we meet someday again. < Arigato >



Photo 3 Our last day of the International Green Volunteer Training

Forest Carbon Credits: Insights from the International Green Volunteer Training

LOEURN Rei

Royal University of Agriculture,
Faculty of Agricultural Biosystems Engineering, Grade 3



During the International Green Volunteer Training in Cambodia, I gained valuable experiences in environmental management and sustainable development. After visited Kna Por Community Forest I heard the solution to protect the forest from community speaker is Forest Carbon Credits this topic makes me interested in and want to know more about it especially apply this to the villagers' forest community and secondary forest.

Forest Carbon Credits are an important financial tool that helps combat deforestation by providing economic incentives to communities and organizations that protect and restore forests. In Cambodia, the government also included this idea to apply to make the solution. To stop cutting down the forest and burning of the forest from people that live around forest resources. Also, from some company that want to take location in forest resources to create industry company. But only the natural or primary forest that can

get the forest carbon credits. That why I want to discuss this problem.

From my own opinion, government should be doing the discussion with the company especially big company from Japan and around the world to give their credit to people that protect the forest resources and apply this credit to secondary and villagers' community forest not only primary or natural forest to help their livelihoods.



Photo 2 Rural survey at Kna Krao village ask them how to use forest resources



Photo 1 Replanting activities

After completing this training, I plan to apply my knowledge and ideas to real environmental challenges as much as I can. I will share and continue to participate in reforestation projects and environmental education programs, if there are another opportunity like International Green Volunteer Training that think about environmental protection.

Messages to my Japanese teachers and student

I really appreciate the opportunity to participate and learn from all of you. Not only the training, but also, I could improve communication skills and English-speaking skills. Also, I could visit some tourist attractions that I have never been before. I hope we will join to protect the international environment, find the solution, and promote the sustainable environmental management. Especially application of the forest carbon credit to secondary and villager's community forest in my home country, Cambodia. Most importantly, I want to thank the donors and sponsors who supported this program. Your

contributions make a real difference in Cambodia by helping young people like me learn how to protect forests and develop sustainable solutions for the future. With your continued support, we can work together to protect global forests, promote sustainable environmental management, and expand carbon credit opportunities for local communities. I hope we can continue our collaboration to create a greener and more sustainable world, especially by applying Forest Carbon Credits to secondary and community forests in Cambodia.



Photo 3 Kna Por Community Forest



Photo 4 Angkor National Park

Connect children and the environment: Insights from the International Green Volunteer Training

SOPHAL Chamnan
Royal University of Agriculture,
Faculty of Agricultural Biosystems Engineering, Grade 4



I. Overview

The 7-day International Green Volunteer Training course was held in Phnom Penh for 2 days, 1 day at Tbong Khmum province and Siem Reap province for 4 days. In addition, we did some activities in the Sraesom Thmey Primary School and Popel Secondary School.

II. Activities

In the Sraesom Thmey Primary School and Popel Secondary School, we did some of the following activities:

1. Introduced ourselves to all the students
2. Ask them of some question: Do you like nature? Do you know that everything around you are connected, both living and non-living?
3. We also taught them how to love trees by collecting fallen leaves and twigs for painting
4. Plant seedlings with students
5. We also chatted with them and played together.

III. Acquired knowledge

After completing this training, I gained a lot of knowledge.

1. Get new ideas to impart knowledge to children by doing activities and asking some questions.
2. I just learned that fallen leaves and twigs can make a painting, it's really amazing to see before.

3. The students love plants, but they don't know how to take care of the plants.
4. Organize activities in stages and manage the situation better.

IV. Plans following the completion of the training

After completing this training, I plan to continue to participate in reforestation activities and participate in some environmental work as much as possible. If I have the opportunity, I will share the environmental knowledge I have learned from this training with children in my community so that they can love the environment.



Photo 1 Workshop activity

V. Conclusion

In conclusion, children's participation in environmental protection and tree replanting is still limited. Because they don't know how important the environment is to them, and they still don't know how to take care of the

seedling. We can teach them how to take care of the environment, starting with how to properly throw away trash and taking care of the seedlings, as well as the benefits of regular practices so that they have the motivation to do all these. Teaching children to love the environment is great because they are our future.



Photo 2 Replanting activity

Messages to my Japanese teachers and students

I am very happy to participate in this program. It is a special opportunity that allows me to learn a lot from this training, not only knowledge about the forest environment, improve English and communication skills, and we also visited some places together and eat delicious food together also, I hope we can teach the next generation to love the environment and the forest together as much as possible.

Finally, I want to thank the donors and sponsors who supported this program. Your contribution makes Cambodian students more open-minded about environmental protection, reforestation and sustainable forest. I hope that children in Cambodia will have such an understanding of current and future environment issues.

外部評価者による所見

東京農業大学 地域環境科学部 生産環境工学科 准教授
TOUCH Narong, Dr.

日本における環境修復・保全是着実に進展しており、授業で写真や動画を用いて紹介しても、学生は「なるほど」と納得するだけで終わってしまうことが多いです。学生がその現実を実感できないことが、一つの課題となっています。現在、日本の環境修復・保全技術やその考え方は発展途上国にも適用されており、カンボジアはその代表的な事例の一つです。

カンボジアでの研修プログラムは、日本の学生にとって、まるでタイムスリップしたかのように日本の技術や考え方の素晴らしさを自分の五感で体験できる、学びやキャリアにとって非常に有意義な機会となっています。また、カンボジアの学生にとっても、普段自然と共に暮らしているために全てが当たり前になっている環境資源について、その価値を理解し、今後の持続可能な開発に貢献できる人材へと成長するための貴重な機会となっています。

さらに、日本とカンボジアの学生同士のディスカッションを通じて、異なる価値観から日本の事例を学び、カンボジアの環境発展に活かすことが期待されます。カンボジア農村部の住民は教育水準がまだ十分とは言えませんが、研修プログラムを通じて自分たちの地域資源を理解し、今後は自ら環境や資源の保全に取り組み、持続可能な資源利用の実現が可能となります。

より良い研修とするためには、参加学生が事前に研修内容を十分に理解し、特にコミュニケーション能力や言語能力を身につけておくことが重要です。研修現地に到着した際には、自らやるべきことを明確にし、両国の学生が協力して問題解決に取り組む姿勢が求められます。また、研修終了後には、得られた経験を次世代に伝える場を継続的に設けることも重要です。さらに、経済的な理由で研修に参加できない学生への支援を拡充することも、今後の課題として挙げられます。

共催団体による評価と今後の展望

特定非営利活動法人 環境修復保全機構
2024 年度 緑の国際ボランティア研修（カンボジア国）担当

まず初めに、本研修の実施にあたり多大なるご支援を賜りました公益社団法人 国土緑化推進機構の皆様へ、心より御礼申し上げます。とりわけ今泉常務理事には、現地までご引率いただき、森林を中心に据えた学びを通じて、研修員の視点や議論がより深く、豊かに展開されるよう導いてくださいました。また、限られた期間の中で主体的に学びに向き合い、充実した研修の場を共に作り上げてくれた研修員の皆さんにも、心より感謝申し上げます。一人ひとりの積極的な姿勢とチームで学びを深めようとする姿勢が、本研修の成果を支える大きな力となりました。

本研修では、2024 年度に植林活動を行った小中学校を訪問し、研修員が企画した環境教育ワークショップや緑化活動を児童・生徒と協働で実施しました。国際 NGO の立場から人材育成や啓発の実践を体感する貴重な機会となりました。また、グループごとの課題に基づいた農村調査では、住民との対話を通じて地域課題を掘り下げ、得られた情報から具体的な提案を導く実践的な学びが得られました。さらに、地域住民による森林管理や廃棄物活用、絶滅危惧種保護など、多様な活動に触れ、森林を軸に持続可能な開発を多面的に考察することができました。

ESD の視点からも、本研修は、持続可能な社会の構築に向けた思考力や態度を育む機会となりました。研修員は成果発表において、得た気づきや学びをもとに、環境教育や地域開発に関する具体的な提案を発表しました。具体的には、アート制作を通して環境問題への認識を醸成させる教育推進や、森林に精通する所得を地域にもたらすための社会や経済構造の在り方への提案、地域間で対話する機会の創出により環境問題や学校教育の在り方を住民自らが思考していくことの重要性などです。更に、報告書の内容からも、持続可能な開発と教育を自分ごととして捉え、今後の進路や所属するコミュニティへの実践につなげようとする意欲が伝わります。現地の住民や学生との協働を通じて、研修員の異文化理解や課題解決に向けた内発的な動機づけが促され、グローバルな視点とローカルな課題を結びつける力が養われたと感じています。

一方で、本研修を振り返る中で、進行や準備の在り方について、今後に向けて改善すべき点も見えてきました。今後は、研修テーマと現地での活動量に応じた適切な事前研修を提供するとともに、参加者が各活動の目的や得られた学びをしっかりと理解・整理できるように工夫を重ねていきます。そして今後も、国土緑化推進機構のご支援の下、現地プログラムの充実と受入機関との連携を深めるとともに、研修員の学びと行動変容がより促進される人材育成プログラムの提供を目指していきます。



The International Green Volunteer Training in Cambodia, February 2025.

This training program was conducted in the Kingdom of Cambodia with the aim of fostering future human resources for international reforestation cooperation, while promoting understanding of the importance of international reforestation efforts and the role played by the 'Green Fund'.

This report is intended to widely disseminate the outcomes of the training, raise public awareness of international reforestation efforts, and serve as a reference for the implementation of future programs.

July, 2025



緑の募金法制定30周年

主催・発行 公益社団法人 国土緑化推進機構
共催・編集 特定非営利活動法人 環境修復保全機構



Published July 2025

© 2025 The National Land Afforestation Promotion Organization/ The Institute of Environmental Rehabilitation and Conservation.
All rights reserved. ※本冊子の内容を無断で転載・複製することを禁じます。